「扉をひらいて」

ヨハネの黙示録　3章 20 節

聖学院大学　日本文化学科教授　清水　均

この3月、サバティカル（特別研究期間）から半年ぶりに大学に帰ってきてまず感慨深かったのは、8号館3階の廊下を歩いていて「先生方の研究室のドアが開いている」のを見たことでした。ご存知の方もいるかと思いますが、8号館の3階には日本文化学科の先生方の研究室があります。そして、この学科の何人かの先生は、在室している際にドアを開けていることが多いのですね。そして、周囲の先生の動向とか、廊下を歩いている学生の様子とかを敏感に捉えようとしている。時にはふとした弾みで廊下に出た時、そこに何人かの先生が集まってきて会談をしたり、それこそドアを開けっぱなしにして研究室内に集って雑談をしたりしている。寂しんぼが多いというか、人好きが多いというか、ともかく、恐らくは昔の長屋で繰り広げられていたであろう光景が日々そこにあるわけです。そんな「日文の日常風景、即ちドアが開いているという光景」を目にした時、私は「自分の居場所に帰ってきたかのような懐かしさ」を覚えたわけです。

「懐かしさ」ということで言えば、以前の日本の家屋、例えば田舎にある私の親の実家を訪れた時の記憶からすると一それは昭和 30 年代から 40 年代のことですが一家の作りがやけに開放的であったように思うのです。もちろん戸締りはしていたのだと思うのですが、平屋建て一階の廊下から容易く外に出ることができて、隣の家の庭に入りこんだり、いきなり道路に出たりできていた。私はそれで人生最初の交通事故にあってしまったわけですが、それはおくとして、ともかく当時は家の中と外との隔たりというものがあまりなかったように記憶します。

『always 三丁目の夕日』という日本の高度経済成長期の人々の風景を切り取った映画がありますが、あの映画の中で近所の人が一つの家に集まってテレビを見るという場面がありました。あんな感じで隣近所の間で壁がなかったのが以前の日本のコミュニケーション風景だったと思います。もちろん、それと8号館3階の研究室のドアが開いている状態というのとが同じというわけではありませんが、ドアを開けていることによる開放感という点では似たものがあるように思います。

テレビで思い出しましたが、かつては家族揃って居間（リビング）でテレビを見るというのが普通に行われていたように思います。サザエさん一家の夕飯のように。まあサザエさんのうちは食事中はテレビは見ていないのですが、あのように家族が揃った状態でテレビを見ていた。それが今は（清水家もそうですが）子供の部屋にもテレビがあったりして、同じ時間帯に家族が違う番組を見ることができる。ステレオも同じで、とにかく当時の最新の電化製品は居間にあった。ステレオはやがてコンポに小型化されて、やはり子供が自分の部屋で一人で聴くという家族に気を使わなくて済む環境になって、やがてウォークマンの登場によって「外で一人の世界に没入できて他人に気を使わずに音楽が聴ける」ようになり、今はスマホで楽曲すら外でダウンロードできる時代。電話も同じで、当初は何故か玄関に家電（イエデン）を置いていたのですが、やがてリビングに移動し、更には子機によって電話は個室で使え

るようになり、携帯・スマホの登場で、これまた電話も外に移動した。今は電話ではなくメールやライン、あるいは SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）によってでしょうが、これまたいつでもどこでも外部と交信することが出来るようになった。

このように、音楽、電話ないしメール、そしてテレビもそうですが、「家の外に個室空間を作ることが出来る」ようになって、家の中でも、近所でも、電車の中でも「個の空間の中」に籠ることで自分という存在のドアを閉めておけるようになっているというのが今という時代なのでしょう。その意味では、今の時代は良くも悪くも「個の空間」を作りやすい環境にある時代ということができるかもしれません。

さて、ここで本日の聖書の箇所を見てみましょう。「ヨハネの黙示録3章 20 節」です。

> 見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。

もちろんここで言われている「戸」というのは比喩的な表現で、私たちの「心」や「意志」を表しています。神の声を聞くために心を開いておくこと、意志を頑なにしないで神に向かって開いておくことが要請されています。そして、「わたしの声を聞いて戸を開ける者があれば」とありますから、「心を開いておく」ならば選択の余地のない誰においても、ということであり、その誰においても「わたしはその中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう」と、一方通行ではない、神との双方向のコミュニケーションが成しえる、ということが書かれています。

ここには私たちと神とがコミュニケート出来る要件、言ってみれば「コミュニケーション能力の一端」が示されているということができるのですが、それは「心の戸を開けておくこと」という、ただそれだけのことでしかないわけです。一見容易いことのように見えます。問題はみなさんの中で、「神」という存在、ひいては「神とコミュニケートする」ということに、どれだけのリアリティを感じることが出来るかということでしょう。多分、信仰を持つことと持たないこととの境界線がここにはあって、多くの人はここで「引いて」しまうのでしょう。ただ、信仰を持つ人の一つの、あるいは根源的な心のありようとしてこのようにして生きる生き方もある、ということに目を向けて見ると良いでしょう。

では、「戸」をたたくのが、「神」ではなく「人」であったらどうでしょうか？その場合、「戸をたたいていること」「戸をあけること」「共に食事をすること」はどれほどのリアリティを持って皆さんの中でイメージできるでしょうか？

先ほど、「今の時代は良くも悪くも「個の空間」を作りやすい環境にある時代」であると申しましたが、そのような状況からすれば、「わたしの声を聞いて戸をあける」ことは難しい、いや、「わたしの声」を聞くことすら難しいのかもしれません。ヘッドホンを装着して音楽を聴いたり、テレビを見ていたりしたら尚更そうでしょう。周囲に存在する「近い人」はほぼ完全に遮断されているわけです。しかし、同時に「個の空間」にいながらラインやメール、あるいは SNS でのやり取りをしている時間は、実は「他者」と繋がっている時間とも言えます。そして、そうしたツールを使っている人は非常に多いわけですから、例えば電車や街中でスマホを使うことで「個の空間」に籠りながらも、同時にその「個の空間」において「遠くの他者」と繋がっていて、多くの人が、その瞬間その瞬間は「他者」である「わたしの声」を聴き続けて

いることになるのかもしれません。ただ、ここでいう「わたしの声」の「わたし」は、聖書では「神」という「見知らぬ存在」であるわけですが、これになぞらえて、キリスト教的な世界ではないリアリティにおいてこの「見知らぬ存在」というものを捉えてみると、たとえばそれは「友人」や「恋人」といった仲の良い間柄の存在というよりも、「赤の他人」「見知らぬ人」「初対面の人」といった間柄が確定していない人々、即ちストレンジャーを意味することになります。特に SNS ではむしろ「良く知らない人」と繋がることが多く、またそういう「良く知らない存在」あるいは「未知な存在」だからこそ「繋がってみたい」と思っている場合も多いわけです。では、そのような「見知らぬ他人」がインターネット上という、ある意味で距離のある状態において存在するではなく、今目の前にいたらどうするか？

大学キャンパスにおいては、2年生以上の人もそうですが、特に1年生にとっては今キャンパスにはこの「見知らぬ人」＝ストレンジャーがあふれているでしょう。同じアドバイザーグループの人、同じ学科の人、他学科の人、あるいは先生たち。そうしたストレンジャーに囲まれながら、しかも授業時間という限定された空間と時間にあって、このストレンジャーたちと何等かの形で関わりを持たなければならない状況があった時、みなさんはどのようにしますか？逃げますか？無難な範囲でやり過ごしますか？あるいは、絶好のチャンスということでその関係に飛び込みますか？―どうでしょう？

この中にはそういうことが得意だ、という人もおられることでしょう。でも、多くの人は得意とは言えないのではないでしょうか。よく知った人であってもコミュニケーションを取ることは難しいのですから、あまり知らない人と交流することはもっと難しいですよね。「なんとなく話しづらいな、怖いな」と感じるのは当然かもしれません。良くも悪くも、人はどうしても他人に対しては色眼鏡をかけて見てしまいがちですから。

「色眼鏡」と言えば、先週の学長講話で清水正之学長先生が「偏見」についてお話をされていました。

この中にもお聞きになった人がいらっしゃると思います。先生は「偏見」あるいは「先入観」というテーマでお話されましたが、その中で「偏見」を生み出す「イドラ」について触れておられました。今このことを繰り返してお話することは避けますが、この「偏見」というものをもたらす要因、即ちイドラと同様な作用をもたらす言葉を、かつて福澤諭吉という人も強調して用いていました。それは「惑溺（わくでき）」という言葉です。この言葉はこの世に「修飾」「虚」「虚飾」というものをもたらす「由縁」として使用されていますが、例えば次のように使われます。

> 智力発生の道に於て第一の急須は、古習の惑溺を一掃して西洋に行わるる文明の精神を取るにあり。（福澤諭吉『文明論之概略』）

即ち福澤は「古い習慣に拘って、新しい物事を見ようとせずに排除してしまうこと」を誡めたのです。ここには「古い価値観」と「新しい価値観」との両方に対する眼差しにおいて「色眼鏡」「偏見」が働いていると福澤は見ており、これでは西洋の文明を取り入れて新しい日本を創ることが出来ないと福澤は考えたのです。福澤は「世界への扉を開く」ために日本人に対し「自らの心の扉を開けること」を求めたといえます。

そう、実は本日の奨励題の「扉をひらく」には「自らの開放」という意味と、「開拓者としての有り方」と

いう二つの意味が含まれています。「自らの開放」というのは、先ほど述べたようなコミュニケーションのあり方を意味し、「開拓者としてのあり方」というのは、例えば「世界への扉を開く」とか「新しい芸術への扉を開く」といったような「今までなかった世界を切り開く」という意味を指します。福澤は「自らの開放」から「世界を切り開く」へと繋がる「扉をひらくことのダイナミズム」を提示したということが出来るでしょう。

ここにおられる学生のみなさんには、是非、この新たな年度が始まったこの時に、「自らの心の扉をひらく者」でもあり、かつ「新たな世界の扉を開く者」となってほしいと願います。そして、この大学ではみなさんにとっての究極のストレンジャーは「神」なのかもしれませんが、この「神」という存在に心を開くこと、また、そのことによって新たな世界を切り開くこと、その可能性というものを是非心にとめておいてほしいと思います。

2016年4月21日　聖学院大学　全学礼拝